
コードギアス 反逆のルルーシュ ~戦慄のリベリオン~

夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 反逆のルルーシュ 〈戦慄のリベリオン〉

【Nコード】

N3414Z

【作者名】

夢

【あらすじ】

ブラックリベリオンから2年。ゼロは復活した。黒の騎士団の双壁であるライとカレンの活躍によって。新総督ナナリーを奪還するために戦闘を繰り広げるブリタニアと黒の騎士団。だがそこへ、謎のナイトメアが襲来する。なんと、そのKMFから音声通信が流れた。その声は、自分をユーフェミア・リ・ブリタリアだと名乗った。今、戦場に新たな天使が舞い降りる。

TURN 01 戦場に舞い降りる天使

「ここは、一体どこだ？」

戦場？なんだ、あの巨大な金属は。

何も、想い出せない。

ルルーシュ・ランペルージは、ゼロの仮面をかぶった。

重い。これが、世界を敵に回した男の仮面だ。

「ライ。君はよくやってくれた」

「いや、戦略的に行動をとったまでだ」

目の前にいる男、ライは、アッシュフォード学園の校庭に倒れていた男だ。記憶喪失で、覚えているのは自分の名前と生活知識だけ。カレンの勧めにより黒の騎士団に入団したライは様々な作戦で好成績を収めた。

ユーフェミアの特区日本が一度は成功に想われた。だが、ユーフェミアは日本人を虐殺。その後、死亡が発表された。その後ブリタニアでゼロが失踪。だが、ライのおかげで今は復活した。ライは絶対的な強さでブリタニアを圧倒している。2人いまやカレンとともに黒の騎士団の双璧と恐れられている。

「私は、君を迎え入れてよかったと思っっている」

ゼロは言った。彼は、ルルーシュは自身の素性を明かしてはいけない。

ルルーシュ・ランペルージは、日本を占領したブリタニア帝国の元皇子なのだ。妹ナナリーのために、彼は世界に反逆した。ある力を使って。

「ライ、君はもう帰ると良い。ナイト・オブ・ラウンズを相手にきつかっただろう」

「ああ、正直、あいつらはとてつもなく強かった。スザクも、カレンがいなかったら死んでたと想う」

「そつだろつな」

ゼロは肯定する。

目の前にいる銀髪の少年は、一体何者なのだろうか。血液検査を執り行うべきか、否か。

きつと、するべきだ。ゼロはそう思い、口を開く。

「ライ、君の血液で検査をしてみようと想う」

「検査？」

「ああ、記憶への手がかりになるはずだ」

「ああ、分かった、ありがとう」

ライは微笑む。

その瞳の奥に、赤い光があった。

アツシユフォード学園クラブハウス。ルルーシュは自室に入った。そこにはあいもかわらず自分の部屋だというようにくつろいでいるC・C。がベッドに座つてピザを食べている。

「ルルーシュ、お前も食べるか？期間限定のサラミだ。美味しいぞ？ま、どっちみちあげないがな」

「毎日毎日俺の金でピザを食いやがつて。この魔女め」

「褒め言葉を言われると照れるじゃないか」

C・C。が不適な笑みを浮べた。

「明日は奇襲をかける」

「そうか。ナナリーを？」

「ああ、ナナリーを救いださなければならぬ」

ルルーシュの瞳が赤く染まっっていく。

「ギアスを使つて」

ルルーシュは言った。

絶対遵守の力、ギアス。どんな者でも一度だけ従わせることのできる力。相手の目を見るだけで効果が出る。

「ナリタではやられたが、今度こそは」

翌日。公には知られていない戦いが始まる。

ここは海の上である。紅蓮とライはナイト・オブ・ラウンズと死闘を繰り広げている。

黒の騎士団もフロートシステムを手に入れた。これで対等に闘える！

「はあ！」

月下をライ専用機に改良した「蒼月」はハンドガンを撃ち込んだ。「くそ、駄目だ！」

スザクはライより劣っていた。ライの操縦技術はスザクを上回っている。

「駄目だ、死ぬ！」

ランスロットにしがみ付いた蒼月はスラッシュハーケンを射出する。

その時だった。

蒼月はランスロットから切り離されていた。

蒼月の両腕がなくなっている。斬られた跡が。

ランスロットも同様に両腕を斬られている。

「ライ、あそこ！」

紅蓮から通信が入る。これはカレンの声だ。

「な、なんだ？」

ライはコックピットのモニターで上空を見上げる。

そこに、銀色のKMFが浮かんでいた。滑らかな形をしたKMFは銃器を青月に向ける。

一方で、ランスロットのコックピット。

『あれは、セシル君のエナジーウイング!?』

アヴァロンからの通信でロイドが驚愕の声を上げている。

「エナジーウイング？」

スザクは呟いた。

その途端、謎のKMFからオープンチャンネルで声が響いた。

音声通信だ。

「わたくしは、ユーフェミア・リ・ブリタリアです！」

「なっ!?!」

「ユーフェミアだと!?!」

その戦場にいる全員が驚愕の声を上げた。

一番驚いているのは、スザクである。

「今すぐ戦闘をおやめなさい!」

まさか、あれに乗っているのはユフィ?

スザクの目が見開かれる。

ユフィはナイトメアの操縦に慣れていない。あんな動きをするわけがない。きつと、パイロットは別の誰かだ。

「もう一度言います! わたくしは、ユーフェミア・リ・ブリタリアです!」

TURN 02 死神の虐殺皇女

「わたくしは、ユーフェミア・リ・ブリタニアです！」
戦場の空気が、がらりと変わる。

「な、ユファイだと！」

ナナリーと対峙するゼロ ルルーシユも驚愕の声を洩らす。

「今すぐ戦闘を中止しなさい！」

「明らかにユファイの声だ……」

「おいおい、虐殺皇女様は死んだんじゃないのか？」

ジノ・ヴァインベルグの駆るトリスタンが閃光を放ち、謎の銀色のKMFに飛び掛った。

MVSをKMFに突き刺そうとするが、あっけなく止められる。

だが、MVSを止めたのは、別のKMFだった。

「なっ、ランスロットだと!？」

ジノは絶句する。目の前にいるのは、スザクが愛機とするランスロットの形状によく似ていた。カラーは白と青。頭部はカブトムシを思わせる一角を持っている。

すると、音声チャンネルが開いた。ランスロットに良く似たKMFからだ。

「この一角獣を倒せると思うなよ」

「一角獣？」

ジノは言葉を濁した。目の前にいるKMFに乗るパイロットは私を侮辱している。

「我々は、ユーフェミア・リ・ブリタニアを保護している。アルフを攻撃するということは、ユーフェミア・リ・ブリタニアを攻撃するということになるぞ」

「アルフ？それがあのナイトメアの名前か！」

ジノは一角獣と名乗るKMFを振り払う。

一度対峙しただけで分かったことがある。これはあくまで、ナイ

ト・オブ・ラウンズとしての勘なのだが……。

目の前にいる『一角獣』は自分よりも遥かに強い。おそらく、アルフという名のKMFは『一角獣』よりも遥かに操縦技術が高い。世界ってのはこんなバケモノを隠していたか。

「ユーフェミアは死んだ！あれは偽者だ！」

ギルフォードがMVSを掲げた。

「ギルフォード卿！何を！」

スザクが止めに入ろうとするが、制止された。

「ジノ！何をするんだ！」

「見てやるうじゃないか、あいつらの実力」

ジノがコックピット内で笑っていた。

ギルフォードの後ろから大部隊が突撃してくる。

最初に動いたのは、一角獣だった。一角獣は華麗な動きで一機ずつ確実に落としていく。一機だけを誘い出し、確実に仕留める。一対一を好む戦い方。

「あれは、ライの闘い方？」

カレンが呟く。モニターでライの駆る蒼月を確認する。武器を構えていた。

「あれは、誰なんだ……」

ライが唸る。モニターに映る映像は信じがたい映像だった。一角獣と名乗るナイトメアが確実に、かつ迅速に敵機を倒していく。

ギルフォードは、おそらく敗北するだろう。

「こしやくな！」

ギルフォードがヴィンセントを飛躍させる。一角獣に攻撃をしかけるが、アルフにとめられた。

「なんだ、こいつ！力が強すぎる！」

アルフは武器を取り出した。MVSだ。だが、少し形状が違う。ブリタニアのMVSより性能があるのか？

「まだ、こちらには！」

フロートユニットを装備したグロースターがランスを投げつける。

アルフは左手を前に突き出した。

すると……………

紅い閃光が放たれた。閃光は数十機のグロースターをランスごと蒸発、破壊させていく。

「あれはあ、紅蓮の輻射波動？」

ラクシャータが眉間に皺を寄せた。

一番驚いているのは、カレン自身だ。自分の愛機の専用攻撃だったはずの輻射波動が謎のナイトメアに扱われている。しかも、遠距離攻撃が可能。今の紅蓮よりも遙かに上だ。

「さあ、シヨータイムだ」

一角獣のパイロットが咆哮をあげた、気がした。

一角獣のスピードが上がる。とても肉眼では認識できない。ただでさえ、アルフのほうが強いと予想しているのに、あの二機は謎が多すぎる。

一角獣はあつという間に大部隊を全滅させた。

そして、アルフも。ヴィンセントをなぎ払い、距離をとる。そしてアルフは何のぶれもなく真正面から突撃する。ヴィンセントは反応することが出来ない。MVSを横に振って両足を斬りおとして後ろに回って左手で頭部を掴んだ。

そして、輻射波動機構が唸りを挙げた。

「そんな、私が、傷一つつけられない！」

ヴィンセントの脱出システムがオート作動するも、後ろにいたアルフに捕まった。そして、想いきり海へと投げられる。

コックピットはなんとかアーニヤの乗るモルドレッドにキャッチされた。

「強すぎる……………だけど」

「あ、待ってライ！」

カレンの声も無視してライは突撃した。手前で迅速し、ハンドガンを撃ちこみながら飛角爪賀を振り下ろす。

アルフは簡単に受け止めた。後ろから一角獣が回り込む。スラッ

シュハーケンを打ち込んで一角獣の攻撃を止めて二機から距離を取る。

「駄目だ、とてもじゃないけど攻撃できない！近づいたらもう終わりだ！」

ライは叫ぶように言った。

目の前にいる二機。その二機はあまりにも、怖かった。

第三話 2人の少年

「なんだ、帝国ってこんなにザコなんだ」

一角獣のコックピットの中で、少年は呟きながら不敵に笑う。

「次は黒の騎士団を相手にすつか？」

【もう相手をしただろう】

アルフのコックピットから通信が入る。通信モニターには、黒い髪と蒼月のような瞳をした若い少年がコックピット座席に座っている。一角獣のコックピットよりもだいぶ広い。そして、その少年の膝に可愛らしい少女が座っている。ピンク色の髪におっとりした瞳。まさしく、虐殺皇女とうたわれた少女ユーフェミア・リ・ブリタニアだ。

「どうだ？ 皇女殿下。奴らは俺たちの交渉に応じないようだぜ」

【仕方ないです、これは攻撃を転じるしかありません。出来るだけ、被害は最小限に】

「そういうと思って、誰も殺しちゃいねえよ」

そうだ、2人の思惑通り二軍のパイロットは全員脱出した、はずだ。

「おいリク。これからどうする？」

金髪の少年がアルフのパイロットに聞く。

【一時退却する。これ以上の戦いは無意味だ。そうだろ、ユファイ？】
無愛想な表情で、リクと呼ばれた少年はユーフェミアに向き直る。

【はい、そのとおりです】
リクは操縦桿をひいた。

「仰せのままに」

アルフは通信を切って操縦桿をひいた。

「おい、後退していくぞ！」

帝国側は追おうとはしない。だが、一人だけ。

「待ってくれ、ユファイ！」

スザクはアルフを追おうとした。

「まで、スザク！今はひくんだ。あれが本物のユーフェミア殿下と
は限らない！」

「でも！」

トリスタンに制止させたランスロット。

「くそお！」

スザクはコックピットのモニターに拳をぶつけた。

「ユフィ。君が本物なら、せめて顔だけでも見せてくれ……」
スザクはコックピットの中でうめいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3414z/>

コードギアス 反逆のルルーシュ ~戦慄のリベリオン~

2012年1月2日01時48分発行